

報告者は東日本大震災後の被害地域における建築関連の動きから、第一に当事者性を引き受けつつ建築家の作家性を打ち消す方向で新境地を予示した、伊東豊雄を中心とする運動「みんなの家」を採り上げた。第二に建物を超長期にわたり残す東浩紀らの「福島第一原発観光地化計画」、南相馬市の仮設住宅地の集会所に壁画と塔を制作した彦坂尚嘉ら、また総じて解体の方向にある震災遺構の中で「奇跡の一本松」が広島原爆ドーム同様の強い意志で保存されている旨を報告した。

震災直後から伊東は「家を失った人々が[...]共有するイメージ」を具えた、「集まって語り合うことのできる原初的なコミュニティスペース」を、「現地の住民と我々[...]と学生」が共同制作する「みんなの家」を着想した。しかしこのシリーズは「原初」ゆえに、傾斜屋根の単純な形態＝「家型」に終始していた。これは建築の新たな形態と役割を追求してきた伊東による、半ば意図された理論的後退あるいは還元状態での思考停止とも解されるが、これを打破したのは陸前高田市での共同設計である。三名の中堅建築家は乾久美子が家型を構想するところに、藤本壮介が建築の祖型としての柱を導入し、平田晃久が内外空間が絡みあう襞としての余白を追求した。この異なる三つの特徴を統合できた切っ掛けは地元住民の活動であった。避難所からの移動時にコミュニティの解体を危惧し、仮設住宅地で世話役を務めている菅原みき子氏が、塩害を受けた杉に囲まれ、津波に洗われた平野部を眺望する高台の敷地への変更を提案したため、2層の家型と3層の物見台による立体的なシーケンスが杉柱の群に絡まる設計が生まれた。伊東はこれを「個を個で超える」動きと表現し、建築界全般に広がるべきモチーフと捉えている。

東らは、廃炉作業に対する国民の関心維持のため、放射線量の下がる二〇三六年を目処に観光施設を「Jーヴルッジ」敷地に造成する構想を唱えている。しかし今後長期にわたる廃炉作業の散文的な日常は、これを「記念／追悼」という本稿の関心から遠ざけるだろう。この点で、復興事業の停滞ゆえに期間は不明確だが、解体を前提に、東北大学五十嵐太郎研究室とはりゅうウッドスタジオ(芳賀沼整)によるログハウス型仮設住宅の集会所に壁画を、その傍に五七五七七のリズムに塗り分けられた「和歌の塔」を制作した彦坂らは注目に値する。背の高い集会場外壁と塔が、プレハブ型仮設住宅の海原に風景を刻み込む。また女川町の津波に基礎を浚われたコンクリート造建物も一棟を除き解体が決まったのと対照的に注目されるのは、陸前高田市の「奇跡の一本松」である。津波には堪えたものの根腐れのため、伐採され防腐処置の後に元の場所に戻された文字通りのモニュメントには、平和記念公園の軸線上に設定されてから保存が決まり、以降ギプスで支えられてきた廃墟＝原爆ドームと同様の集合意志が、すでに宿っている。日本人の「無常観」を理由に積極的に記念碑を作らない態度とは逆に、何らかの記念物の存在が、今後歴史の語りの多様性を確保することも考えられる(福嶋亮大『復興文化論』)。それが「個を超えた」「みんなの家」なのか、仮設のまま解体される、あるいは常設に切り替わる塔なのか、それともいわばフェイクの一本松なのかは、今後を見極めねばなるまい。